

安芸太田町立加計中学校

(1) 学校の概要

広島県西部に位置し、生徒数57名、教職員数23名の学校である。平成27年度から3年間、県教育委員会の「『学びの変革』パイロット校事業」のパイロット校に指定され、「主体的な学び」を進めるための指導内容・方法を研究開発している。

(2) 教育活動

加計中学校では、「ア．教育目標の具現化」を目指して、育成すべき資質・能力を設定するとともに、その評価の仕組みの確立を目指している。また、教科等の資質・能力育成のための指導と評価についても先進的な取組を試みている。

ア 資質・能力の設定と評価

学校教育目標「広い視野を持ち、地域に貢献し、主体的に生きる生徒の育成」とし、それに基づく目指す生徒像、資質・能力は次のとおりである。

【目指す生徒像】

- 互いのよさや違いを認め合い、共に伸びる生徒
- 人のためになる行動ができる生徒
- 学びを生かし、他者と協力し、目標に向かって挑戦し続ける生徒

【資質・能力】

《スキル》

- コミュニケーション能力
- 論理的・建設的批判能力

《意欲・態度》

- 主体性・積極性
- 回復力・耐える力

《倫理観・価値観》

- 自らへの自信
- 高い志

資質・能力を評価するための評価基準として、上の六つの資質・能力毎に生徒が資質・能力を発揮している姿を示したルーブリックを作成している。教科においても同様に、ルーブリックを作成し、それを基にした質的評価を目指しているところである。あわせて、どの評価基準であっても、生徒の実態に応じて見直しを図る必要がある。加計中学校では、その改善の方向性として、協調学習での生徒の変容から見直すという「『逆向き』ルーブリック」の考え方をとっている。このルーブリックの改善に伴って、教材や学習指導案の改善を行うという改善のサイクルを目指している。

表1 資質・能力のルーブリック

	資質・能力	レベル1	レベル2
スキル	コミュニケーション能力	互いのよさや違いを認め合うことができる。	自分の考えを分かりやすく伝え、時と場に応じた適切なやりとりをすることができる。
	論理的・建設的批判能力	自分の考えの根拠をもち、筋道立てて述べることができる。	より良い解決の改善点となる考え方や方法を生み出すことができる。
意欲・態度	主体性・積極性	自らが課題発見し、その解決に向けて行動している。	課題のより良い解決策を集団に働きかけている。
	回復力・耐える力	困難に直面しても前向きに現状を把握し、機会の到来まで自分の夢や理想への希望を持ち続けている。	困難な状況や自らの失敗をも自分の成長のエネルギーとして生かしている。
・倫理観・価値観	自らへの自信	自分自身を大切に、向上させようとしている。	結果だけではなく、努力した過程を大切にしている。
	高い志	将来への夢や理想の実現に向けて、見通しと向上心を持ち、努力し続けている。	広い視野を持ち、高い理想を掲げて、地域社会、日本、世界のために貢献しようとしている。

イ 「課題発見・解決学習」の単元開発と実践

加計中学校を所管する安芸太田町では、平成22年度から東京大学と連携して「新しい学びプロジェクト」に参加し、町内の小学校・中学校・高等学校で協調学習による教育実践が進められてきている。加計中学校では、広島県の目指す「コンピテンシーの育成を目指した主体的な学び」の実現に向けた研究を進めるに当たって、「主体的な学び」は、知識構成型ジグソー法による協調学習で実現可能であると整理し、研究を進めている。

具体的には昨年度に引き続き、学校の研究主題を「他者との対話の中で知識や考えを協調的に構成し、その先の新しい問いを見出す力の育成～建設的相互作用を基盤とした授業づくりを通して～」と設定し、広島県教育資料等で示されている、主体的な学びを促す学習の一つである「課題発見・解決学習」の単元開発及び実践に取り組んでいる。

その開発・実践に当たっては、知識構成型ジグソー法による協調学習、「前向き授業」設計の考えを取り入れることとしている。

さらに単元デザインのポイントとして、生徒が「これは問題だ」「やってみたい」と思うような「答えを出すべきだと考える問い」、生徒が目標に向かって主体的、能動的に学びを進めていくための「子供たちが踏み台にできる視点や考え方」の二つを設定している。

この工夫により、生徒は「答えを出すべきだと考える問い」で動機付けられ、提示される視点や考え方を基に、ジグソー法による他の生徒との対話・協働を通して、自分なりの答えや考えを創り出すことができる。教員は、生徒から出てきた新たな問いを

受け止め、「前向き授業」設計の考え方により、さらなる解決への学びを実現するための単元をデザインしていくことになる。

単元開発・実践の例として、今年度の第一学年の総合的な学習の時間で実施された「よさこいプロジェクト22」がある。このプロジェクトには、35単位時間を配当し、生徒は地域でつくられた「神楽よさこい」を、地域の三つの中学校が合同で開催する合同文化祭でPRをすることをゴールとして、課題発見・解決学習の過程を通じて、グループの仲間や地域の関係者と対話・協働しながら主体的に学んだ。

35単位時間の中で、課題発見・解決学習のサイクル（「課題発見」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・創造・表現」「実行」「振り返り」）を二巡することになる。1回目のサイクルでは、自分たちが設定したプロジェクトテーマに関する調査等を行い、そこから得た情報を基にまとめた「よさこいプロジェクト」を、生徒、教員だけでなく、地域の関係者が出席する「よさこいプロジェクト報告会」で提案し、意見を受けることがゴールである。



図1 よさこいプロジェクト報告会の様子

2回目のサイクルでは、文化祭でのポスター展示に向けて、報告会で受けた意見を基に提案内容の修正を行うとともに、神楽よさこいをかっこよく踊ることを目標としてクラスメートや地域の方と協働しながら試行錯誤を繰り返し、最終ゴールである合同文化祭での展示や発表を迎える。この単元で設定した資質・能力は、このプロジェクトを通して高まりを見せた。

ウ 生徒の変容の見取り

加計中学校は、協調学習を通した生徒の変容を捉える一つの方法として、多面的対話分析法を採用している。この分析法では、授業中の生徒の対話を

録音し、発話解析プログラムで録音データを解析して、生徒個々の学びを捉えることができる。この分析により、質の高い評価を行うことができるだけでなく、これまで見逃していた生徒の良さを見出すことができている。また、生徒が考えを深めたり、つまづいたりする箇所が明確になるため、次の授業や単元のデザインにも生かすことができる。

エ 教科以外への協調学習の発展

教科に留まらず、その他の教育活動でも協調学習の考え方を取り入れた実践が行われている。例えば、男子バレー部では部員を三つのグループに分け、試合の映像を見て、あるグループは「相手の良いところ」、別のグループは「自分たちの良いところ」、また別のグループは「自分たちの課題」を見付け出す。その後、部全体で出てきた内容をもとに練習等の改善案を自分たちで考え出すことを行っている。部活動の顧問は、「生徒は協調学習を通して、自分たちで話し合っ最善解を見付け出すことに慣れている。次の試合に向けての改善案を考え出すことには、彼らにとって話す必然性、聴く必然性が存在する。」と述べている。

(3) 経営活動

加計中学校は、協調学習を通した教科間や学校間の連携、地域等の関係者との連携（「カ・家庭・地域社会等」）を通して、自校の教育の充実を図っている。

ア 協調学習で教科間、学校間のつながり

中学校での授業研究では、各教科の専門性から生ずる「教科の壁」が存在し、研究協議会等において協議が活発にならないことがよくある。

加計中学校ではこれまでの協調学習の実践を通して、子供の学びの姿を見るとき視点の教員が共有できており、その視点に基づいて教員が活発に協議を行っている。また、安芸太田町全ての学校で協調学習が行われていることにより、地区の他の中学校、地区の小学校や高等学校との教科教育研究会においても、共通の視点で子供の姿について語り、研修に深まりができています。

イ 地域との連携

地域の協力を得て、生徒の地域貢献や奉仕の精神を養うための取組を行っている。町の社会福祉協議会や地域の振興会の支援のもとに実施する、地域のボランティア清掃、ふれあいコンサートを通して、生徒は地域の方々との交流を深めている。また、例年9月の「しわいマラソン」では、地域の方々とともに応援ボランティアを行っている。